遠敷郡上中町大鳥羽城山古墳について

古川　登

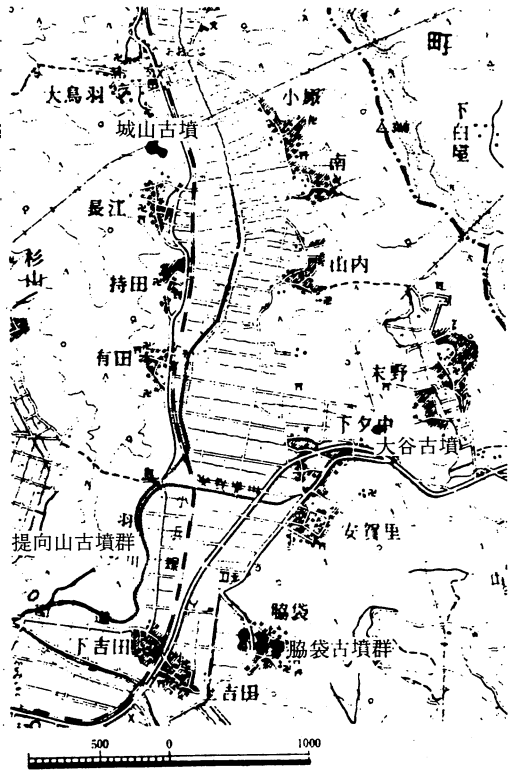
一

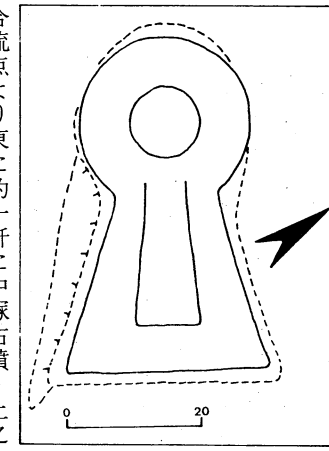
ここ数年の間、筆者の住む美浜町においても次々と遺跡が破壊され消滅している。周知の遺跡でさえ事前に調査される事もなく建設機械の前に消滅したものもある。浄土寺遺跡「半壊」興道寺古墳群「16基以上消滅」丹生学校遺跡「消滅」などがある。周知の遺跡でさえこの状況であるので、未確認の遺跡などはその存在すら知られる事なく消滅しているのである。分布調査の徹底が望まれる。今年の夏に調査された興道寺窯も先年の五月筆者の発見までは知る者もなかったのである。

本稿では城山古墳の調査報告を行い併せて若干の私見を述べたい。

二

上中町下吉田で北川に合流する鳥羽川の右岸、堤より大鳥羽を径て海士坂に至る丘陵には三十基余りの古墳が分布している。そしてそのほとんどは規模一〇米前後の後期古墳であり、前期古墳と考えられるものは城山古墳と提向山古墳群だけである。鳥羽川の左岸地域には三〇米の規模を有する円墳で、大形の横穴式石室を内部主体とし六世紀中葉に編年される下タ中大谷古墳を初め三十基余りの後期古墳が分布している。鳥羽川と北川の





合流点より東に約一粁に中塚古墳・上之塚古墳・西塚古墳の三基の前方後円墳と円墳一基からなる脇袋古墳群が所在する。そのうち西塚古墳は大正五年、国鉄小浜線の工事の為の土取中に後円部より墳丘の主軸に直交する竪穴式石室が発見され、鏡二面・金製耳飾・馬具・短甲・眉庇付冑・衝角付冑他が出さしており五世紀後葉に編年される。

城山古墳は大鳥羽地区と持田地区の境界にある城山丘陵の一二〇米ライン、平野部との比高差約五〇米に所在する前方後円墳で故森下譲氏により発見され斎藤優氏がその略図を報告されている。

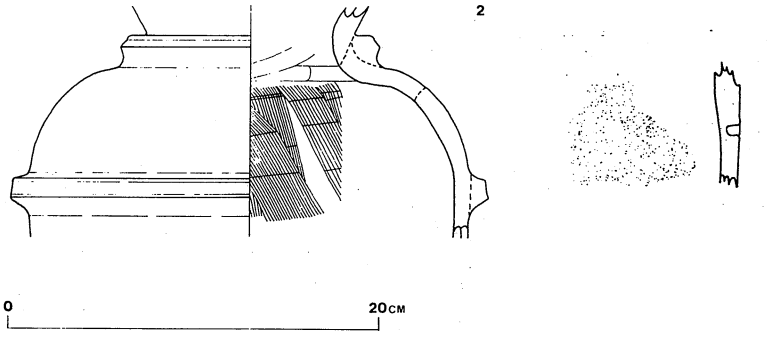
三

城山古墳の略側値は次のとおりである。全長約五四米後円部径約二五米同項部径約一〇米同高約六米くびれ部幅約一五米同項部幅約六米前方部幅約三〇米同項部幅約一〇米同高約五米。

前方部前面よりくびれ部に至るまで幅約二米のテラスが認められるが後円部側面では幅約一米になりそれよりわからなくなる。後円部後方には幅約二米のテラスが認められ、このテラスより約一米低く幅二〇米程の平坦地が認められる。この平坦地はゆるやかな傾斜をもちそのまま丘陵につづいている。これは丘陵の切断個所であろう。前方部南側のテラスの下に最大幅約四米のテラスが認められる。このテラスはくびれ部より前方部端にかけて認められる。葺石は墳丘の各所に散見し山石によるもので河原石は認められない。埴輪片は前方部南側のテラスに多く散乱している。そして後円部項と前方部項とは盗掘されている。

城山古墳は後円部の径が前方部の幅より小さくなっている。つまりこの事は後円部の側面に幅のせまいテラスが一部に認められるだけでそのまま急な斜面に下降しているが、前方部では南側に二米のテラスの下に四米の幅のテラスが認められる。そして丘陵の尾根を見ると後円部の位置している所が前方部の位置している所よりもせまいために、後円部の径が小さくなったものと考えられる。

後円部の径が前方部の幅より小さい事が地形の制約によるものとしても、なお前方部は異状に開いている。この前方部の開きは福井市麻生津安保山二号墳・岡山県車塚古墳・奈良県箸墓古墳などに見られる前方部前面が極端に開く云わゆるバチ型の可能性がある。そして前方部は尾根の中心に位置せず北側によっている。これは城山古墳が南の鳥羽川下流の方向を意識して造営されたのではないかと考える。それは前方部南側にのみテラスが二段あり、見かけの上では二段築成で全長も六〇米程の規模に見える事により理



解されるものと思う。

埴輪は南側のくびれ部で採集した一と前方部南側の最下段のテラスで採集した二を図示した。一は刺突のある埴輪片で赤褐色を呈し焼成は不良である。二は朝顔形埴輪で径二三・三糎現高一二・三糎で赤褐色を呈し、焼成は不良で外面はナデによる調整が認められ内面にはタテハケによる調整が認められる。埴輪の製作技法は二種類以上に分類する事が可能である。形象埴輪として家形埴輪と衣蓋状のものがあり、黒斑らしいものがある埴輪片もある。

四

以上が城山古墳の概要である。まずその造営時期は大森宏氏が五世紀末から六世紀と推定されているが、これは城山古墳の前方部の幅が後円部の径よりも大きい、いわゆる六世紀型と呼ばれる墳形によるものであるがすでに述べたようにこの墳形が地形に制約されたものと考えられるので、墳形を根拠として時期を求める事は当を得ていないように思われる。そして城山古墳の内部主体が明らかでない今日、時期を限定する事は困難ではあるが現在、知り得る事より時期について検討してみるならばその立地が丘陵の尾根上である事・丘陵の切断がなされている事・葺石が山石のみである事・埴輪が川西宏幸氏の編年によるII期ないしIII期に該当する事などより四世紀後葉から五世紀前葉頃に推定しておきたい。

次に城山古墳の被葬者の性格について考えてみたい。城山古墳の被葬者は基本的には鳥羽川流域に生産基盤を持ち統治した首長と考えられる。しかし鳥羽川流域の古墳のほとんどは径一〇米前後の後期古墳が大半であり、城山古墳に後続する大形古墳は認められない。城山古墳に最も近い大形古墳は鳥羽川と北川の合流点より東に約一粁にある脇袋古墳群である。ここで若狭に所在する前方後円墳を見てみよう。現在、若狭においては一一基

の前方後円墳が確認されている。そのうち詳細の明らかでない小浜市多田古墳群と検見坂古墳群に属する二基を除いたものが表である。小浜市に所在する二基について現在知り得た事は規模は三〇米から四〇米で埴輪及び葺石は確認されず、墳形と立地より前期に造営されたものであろうと云う。おそらく多田、検見坂地域における地域首長墓であろう。

表には九基の前方後円墳を示してある。獅子塚古墳は全長三二・五米で埴輪はあるが葺石はなく、三方郡の耳川流域を中心としたところの地域首長墓と見られている。他の八基は鳥羽川と北川の流域に集中しており、規模も五〇米をこえ埴輪と葺石それに大形の周濠を持つものもある。白鬚塚古墳では埴輪と葺石は確認されていないが持っているものと考えられ、上之塚古墳も葺石を持っているものと考えられる。

五〇米をこえる前方後円墳で埴輪・葺石・大形の周濠・埋葬施設・副葬品などその一つ一つにおいても、若狭にある古墳の多くには認める事の出来ない要素である。古墳の造営は首長権力の表現であると云う。ならばこの八基の前方後円墳に見られる優位性は、各地域集団の首長よりも上位の階層に属している事が云えるし、それは各地域集団を統合してより広い地域に君臨した首長層である事の現われであると考えられ、そして各地域集団の統合を成し得た首長が城山古墳の被葬者であると考えられるのである。

なお城山古墳の図はあくまでも見取図であり正確なものではないので、目安程度に考えていただきたい。そして最後に城山古墳を発見された後にそれを報告する事もなく、若くして他界された故森下譲氏の御冥福を心より祈るものである。

古墳名	規模	埴輪	葺石	周濠	立地	所在地
獅子塚古墳	約32・m	○			立地	三方郡美浜町郷市
城山古墳	〃54m	○	○		丘陵	遠敷郡上中町大鳥羽
中塚古墳	〃60m	○	○	○	山麓	遠敷郡上中町脇袋
上之塚古墳	〃90m	○	?	○	〃	〃
西塚古墳	〃67m	○	○	○	〃	〃
十善の森古墳	〃60m	○	○	○	〃	遠敷郡上中町天徳寺
上船塚古墳	〃84m	○	○	○	〃	遠敷郡上中町日笠
下船塚古墳	〃88m	○	○	○	〃	〃
白鬚塚古墳	〃53m	?	?	○	〃	小浜市平野

註一
美浜町丹生字浄土寺に所在する縄文遺跡で中期に属する多量の土器片と石錘四〇本・石鏃五〇本・磨製石斧六・ナイフ型石器一などが発見されている。

註二
美浜町興道寺に所在する三方郡最大の群集墳で一八基以上の古墳があったと考えられている。

註三
一九七八年五月に筆者によって発見された六世紀前葉～後葉頃の須恵器窯。

註四
上中町提に所在する八基の円墳・斉藤優氏の御教示による。

註五
若狭上中町の文化財・上中町教育委員会一九七五による。

註六
福井県史跡勝地調査報告第一冊、福井県内務部一九二〇による。

註七
若狭上中町の古墳・上中町教育委員会一九七〇

註八
安保山古墳群・福井県教育委員会一九七六による。

註九
岡山県岡山市湯場に所在する前方後方墳で三角線神獣鏡を含む一三面の境他が出土している。

註一〇
奈良県桜井市三輪町に所在する前方後円墳で後円部より特殊墳輪が出土している。

註一一
註二に同じ

註一二
川西広幸・円筒埴輪総論・考古学雑誌六四—二

註一三
小浜市多田古墳群と検見坂古墳群は本来同一のグループの古墳群であるが、小浜市埋蔵文化財分布図の記載に従がった。

註一四
現在、まだ明確ではなく今後の課題である。